

第3話 遷幸の三上皇

遠い島々に遷された三上皇の深いお歎き。 遠国での淋しい崩御

隠岐の後鳥羽上皇

しかし一方、承久の乱に全敗して、後鳥羽上皇の志が空しくなった後の朝廷は、全く火の消えたようにも静かで、淋しく、誠にお気毒な有様でした。

況して、遠い島々に遷された3上皇の朝夕の事などは、ただ想像するだけでさえ胸のふさがる思いがします。

中でも後鳥羽上皇の隠岐の御所は海岸から少し入ったばかりの山陰に、大きな巖の立っているのを利用して、松の柱に葦の屋根を葺いた、僅かに雨風を凌ぐばかりの仮屋でしたから、たまに潮風の烈しく吹く時などには、荒海の浪の音はその仮屋を揺らすほどにも騒いだ。

ある日、上皇は、

われこそは新島守よ隠岐の海の あらき波風こころして吹け

と詠まれたが、まだ馴れない新参の島守であるから、気をつけて吹いてくれ、と仰せられたそのみ心のうちのお淋しさはいかばかりであったでしょう！ また、

同じ世にまた住の江の月や見ん 今日こそ余所に隠岐の島守

とも詠まれた。今は隠岐の島守の身であるが、一生のうちには再び都に還って住の江の月を見る事が出来ようか、と仰せられたのです。いかに心細く思し召されたことだったでしょう！

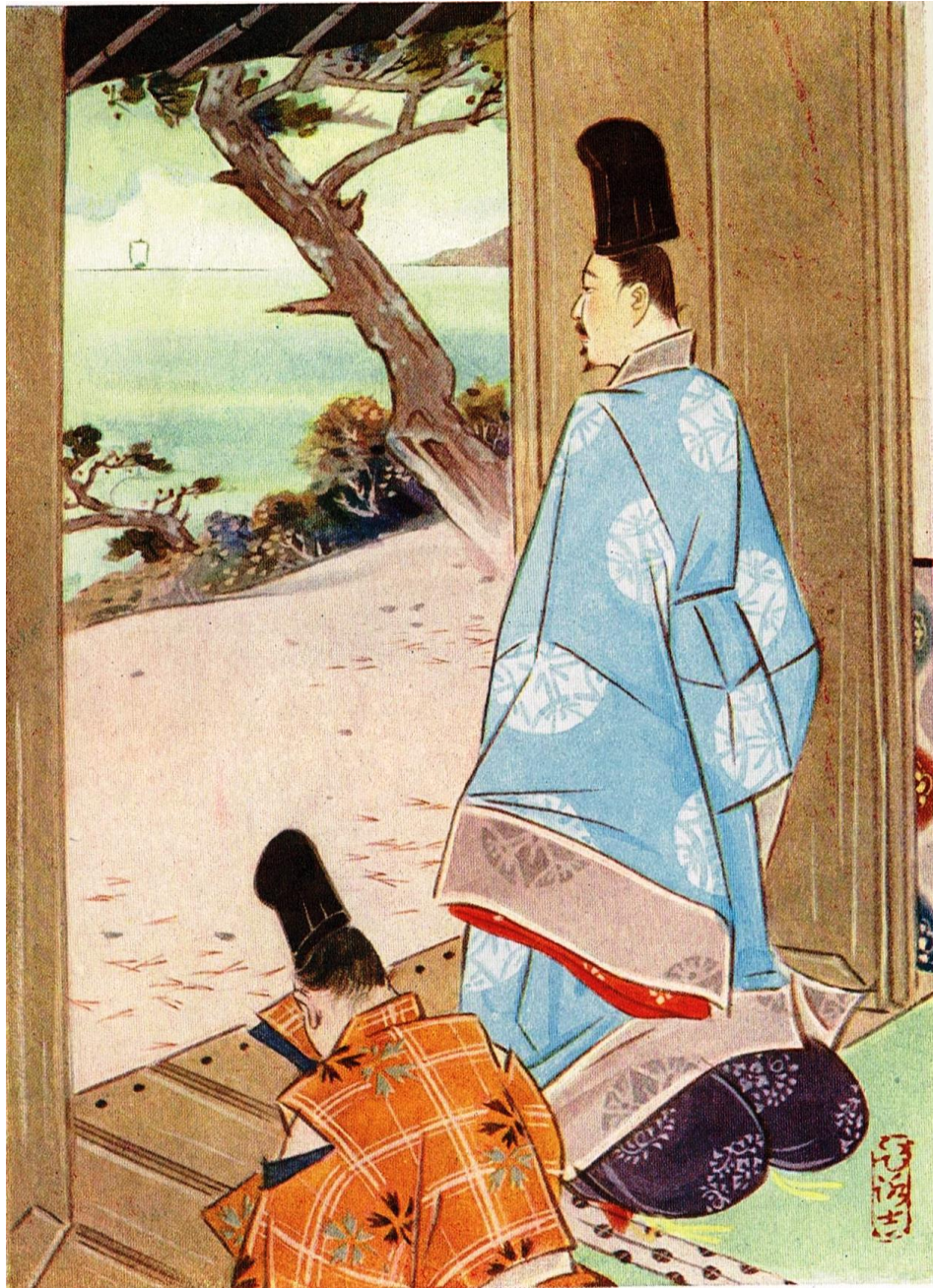
御母のお便り

また、ある初秋の日の夕暮れに、沖のほうから木の葉の浮かべるにも似た小さい船が漕いで来るのを、海士の釣船かとお覧になっていると、都からのお使いで、墨染の御衣や夜の御衾などを、御母の七條院から送って来られたのでした。都の夜も漸く寒くなるにつけて、御母は遥かに隠岐のお住居の侘しさを思いやらせられたのでした。添えられたお手紙をお手に取ると、上皇はお胸もせきあげる心地をなされたが、思い切って開いてご覧になると、「斯うして浅ましい月日を経ているのも、年を取って今日明日とも知れない命のうちに、せめて今一度、何とかしてお逢いしたいと思えばこそです。お遭いも出来ずに死んだのでは死にきれません」などと書かれていたので、お手紙をお顔に押し当てて泣き給うばかりでした。

たらちねの消えやらで待つ露の身を 風より先にいかで問はまし
八百よろづ神もあはれめたらちねの われ待ち得んと絶えぬ玉の緒

これがその時のお歌で、その意味は、前のは、「母君が今一度逢いたいとの御一念で、消えやらぬ露にも似たご老体でお待ちになっておられるのを、せめては無常の風の吹かぬ先に、どうかして訪い奉りた

いものである」というもので、後のは、「母君の命も絶えないばかりになってお待ちになっておられるのを、八百万の神々もあわれとおぼしめして、再び都に帰らせたまえ」というのであります。



隠岐 中ノ島 隠岐の御所に憂き年月を送る後鳥羽上皇

尊い上皇の御身を以って、あゝ、何という哀れの深いお歎きであったのでしょうか！ けれども、都に帰られる時はついに来なかった。それで、後には、

浪間なく隠岐の小島の濱 庇 久しくなりぬ都へだてて
限りあればさても堪へける身の憂さよ 民の藁屋に軒をならべて

なども詠まれて、隠岐の小島の侘住居の物憂き事を歎かれたが、ついに、

われながら疎みはてぬる身の上に 涙ばかりぞ面がはりせぬ

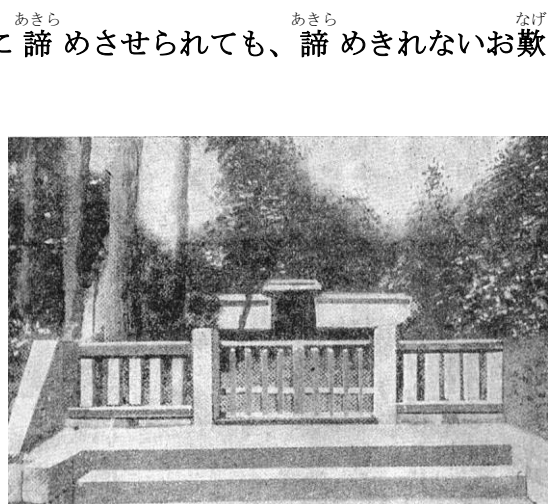
とも詠まれた。その意味は、「わが身ながら愛想もつきはてた浅猿しい身の上になったのに、涙ばかりは

第3話 遷幸の三上皇

昔のままに、今も変わらずに落ちてくる」というもので、いかに諦めさせられても、諦めきれないお歎きが窺われます。

こうして上皇は侘しく隠岐の島にましますこと19年、第87代四條天皇の御代に御年60でお崩れになった。近くの山で火葬に付して、その御遺骨を、その時までお側にお仕え申していた藤原能茂という、元の北面の武士で髪を剃って坊さんになった者が、頸に懸けて都に上って来たので、京都の大原に葬り奉った。

今、京都郊外の大原にある大原陵が即ちそれです。



後鳥羽上皇の御遺址（隠岐中ノ島）

佐渡の順徳上皇

また、佐渡に遷された順徳上皇にあっても、いかに侘しくお暮らしになったことでしょうか。そのお住居の址は今も黒木御所址として、佐渡の金沢村に残っていますが、そこを通る旅人で、眼をこれに注いで涙ぐまぬ者はないという事です。上皇はその黒木のままの粗末な御所に淋しく暮らされながら、遥かに隠岐の島の御父君の事を思いやられて、

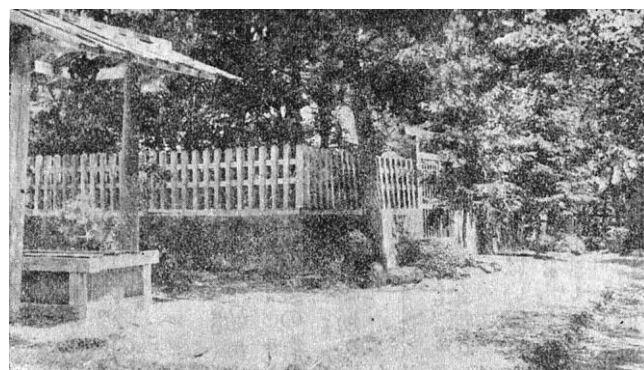
いざさらば磯うつ波にこと問はん

おきの方には何事かある

と詠まれたりした。

後鳥羽上皇がお崩れになったことをお聞きになってからは、明け暮れ悲しみの御涙にくれられていたが、ついにその3年の後に、御自ら御食事を絶って、佐渡の島にお崩れになった。時に御年46でした。

佐渡の真野の里に葬り奉ったが、後にご遺骨を改めて父君と同じ京都大原の陵にお遷し申しました。



佐渡真野 順徳上皇黒木御所址

阿波の土御門上皇

一方、土御門上皇は、始めは土佐の幡多にお遷りになり、翌年、阿波に遷られたが、11年の後、後堀川天皇の御代に御年37で、3上皇の中では一番先にお崩れになった。その御所の在った板野郡の里浦という所 -- 今の徳島市の北方約16kmの掘江村 - で火葬に付して、そのご遺骨は山城国乙訓郡の金ヶ原にお遷しして葬った。今の金原の陵がそれです。

水無瀬宮

第3話 遷幸の三上皇

こうして3上皇はいづれも北條氏のために遷された遠国で淋しくお崩れになったのでした。誠に
おそ しい せつつ みしま しまもと ひろせ かんべい みなせぐう
長れ多い次第ではあります。今、摂津国三島郡島本村広瀬に在る官幣中社水無瀬宮にはこの3上皇をお
まつ ごと ば りきゅう ごだいご みよ
祀りしています。この地は後鳥羽上皇の水無瀬離宮のあった所で、また、後には、後醍醐天皇の御代に、
ちゅうしんくすのきまさしげ まさつら わか さくらいえき ところ
大忠臣楠木正成がその子の正行と別れたので有名な桜井駅(大阪北部)から東十町あまりの処であります。

(第3話 遷幸の三上皇 終わり。次は前頁に戻り、第4話 北條氏の仁政 へ)